

アベリアの生産の現状と技術的課題

東京都農林総合研究センター
緑化森林科

佐藤 澄仁

はじめに

植木産業を取り巻く環境は厳しく、バブル崩壊後、この25年の需要は減少の一途をたどり生産圃場には行き場を待つ緑化植物が規格寸法を上げて在圃している。出荷されない植物が圃場にあることは、新たな仕込みがなされていないことから需要のある樹種や規格寸法によっては品薄状態が続くことにもなり、需要と供給のバランスが著しく崩れた状態が改善されないままとなっている。また、緑化植物の需要低迷は緑化植物生産者の生産離れを助長し、一部の公共工事に利用される樹種では入手困難にもなっている現状がある。

一方、都市は肥大化傾向が続き緑化スペースが狭められ、近年、夏季の猛暑日や熱帯夜の日数が増加する傾向にある。これに伴い熱中症の発症数も増加していることが報告されている（図

-1)。このような都市部の温暖化やヒートアイランド現象への対策として、公園の創出や街路樹の増加、屋上・壁面緑化など植物の蒸散効果を活用した、熱環境制御技術が期待されているが、景気の低迷や公共工事の減少に伴い十分とは言えない。都市住民からの行政への要望も防災に次いで都市緑化の充実が求められてはいるが、肥大化する都市においては緑化スペースも限られてきている。このような中、都市緑化に求められている緑化植物は、都市環境緩和機能や景観向上機能の他にも劣悪な植栽環境にも耐えられる性質も求められている。また、小スペースにも植栽可能で維持管理コストが少なく、特殊な管理技術を要しない樹種や生物多様性に配慮した植物の需要も今後高まることが予想される。

1. アベリアの品種

アベリアは、スイカヅラ科のツク

バナウツギ属のことで、一般的に緑化植物として流通しているアベリア (*Abelia×grandiflora*) は、中国原産の *Abelia chinensis* と *Abelia uniflora* の交配種である。日本には大正時代に入ってきたといわれ、葉は卵形から楕円形で対生し、縁には荒い鋸歯がある。樹高は2mになり、枝先や葉腋から円錐花序をだし、淡い紅色を帯びた花を春から秋まで咲かせる。公園、街路やビル周辺に生垣状に植栽されている。昆虫の吸蜜樹としても知られ蜜源としての利用もされている。病害虫の発生が少なく丈夫で枝をよく出し、刈り込んで色々な形に仕立てられる（写真-1）。

(1) アベリア (*Abelia×grandiflora*)

アベリアの基本種で露地栽培、コンテナ栽培とも多い。地際でよく分枝し、倒卵形の樹形となる。枝が赤みを帯びて、葉は光沢がある。花は白色で樹冠いっぱい6月から11月頃まで咲き続ける。乾燥には極めて強く、刈り込みにもよく耐える。移植が容易である。

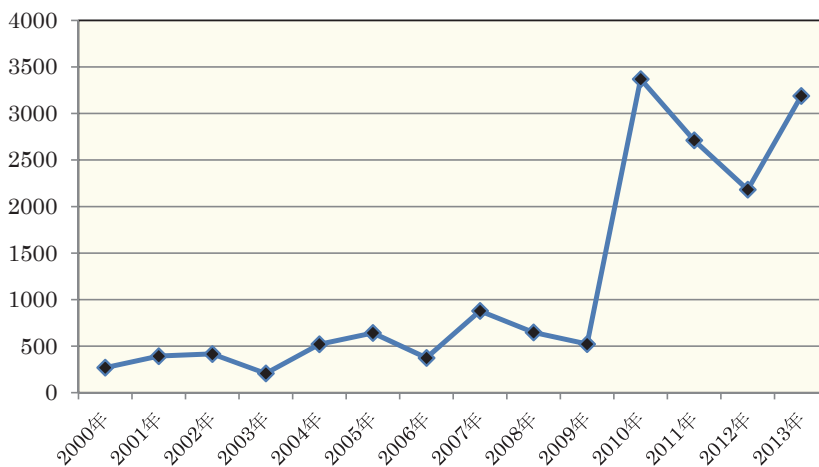


図-1 東京23区の熱中症患者数の年次推移



写真-1 アベリアの露地栽培



写真-2 A. 'Edward Goucher'



写真-3 A. 'Francis Mason'



写真-4 A. 'Hopleys'



写真-5 A. 'Confetti'

(2) アベリア「エドワード・ゴーチャー」
(*Abelia* cv. 'Edward Goucher')

アベリアの園芸種の耐寒性常緑低木で、地際でよく分枝し、倒卵形の樹形となる。枝が赤みを帯びて、花色はピンク色が濃く、花つきの良い品種である。刈り込みにもよく耐え、萌芽力がある(写真-2)。

(3) アベリア「フランシス・メイソン」
(*Abelia* × *grandiflora* 'Francis Mason')

地際でよく分枝し、倒卵形の樹形となる。新葉の展開時期は、黄斑が鮮やかであるが後に消える。全体的に黄色く明るい。花は白色で樹冠いっぱいになり6月から11月頃まで咲き続ける。寒地では落葉する(写真-3)。

(4) アベリア「ホープレイズ」
(*Abelia* × *grandiflora* 'Hopleys')

基本種に比べ、生育が遅く樹高も低いのでコンパクトに仕上がる。黄斑輪のある葉は、寒さに合うと黄色の部分に赤みを帯びる。日当たりの良



写真-6 グランドカバー生産者のコンテナ栽培

い場所に植栽すると特に斑が美しい。刈り込みにも耐え、花を楽しめるほか、寄せ植えや地被としても利用できる(写真-4)。

(5) アベリア「コンフェッティ」
(*Abelia* × *grandiflora* 'Confetti')

葉色は、緑色に白、クリーム、ピンク色の斑が混じる優しい色合いで寒さに合うとピンク色に紅葉し、花だけではなく葉の変化を楽しめる品種である。生育は遅くコンパクトな樹形で花壇などでも楽しむことができる。日当たりを好み、乾燥に強い(写真-5)。

2. アベリアの生産状況

都市における常緑低木類の植栽利用状況を東京都の「街路樹充実事業」でみると、平成20年から平成24年のいずれの年でも第1位はオオムラサ

キツツジ、第2位はサツギが上位を占めている。アベリアは数年ごとに上位でみかけ、イヌツゲ、クチナシ、シャリンバイなども同様に推移している。ヒラドツツジは徐々に植栽利用が減少する傾向である(図-2)。

緑化植物の生産量の把握は困難であることから、日本植木協会が毎年行っている都道府県別供給可能量調査からアベリアの生産実態を把握すると、露地栽培は平成23年には65万本の生産量がみられたもののその後、徐々に生産量が減少し、平成27年度には41万本と大きく生産量が減少した。コンテナ栽培(写真-6)は平成23年では44万本の生産量であったものが平成25年には露地栽培を上回り平成27年度には66万本に増加している。アベリアの露地とコンテナ栽培を合わせた全体の数量は、平成23年に110万本の生産が全国にみられ平成

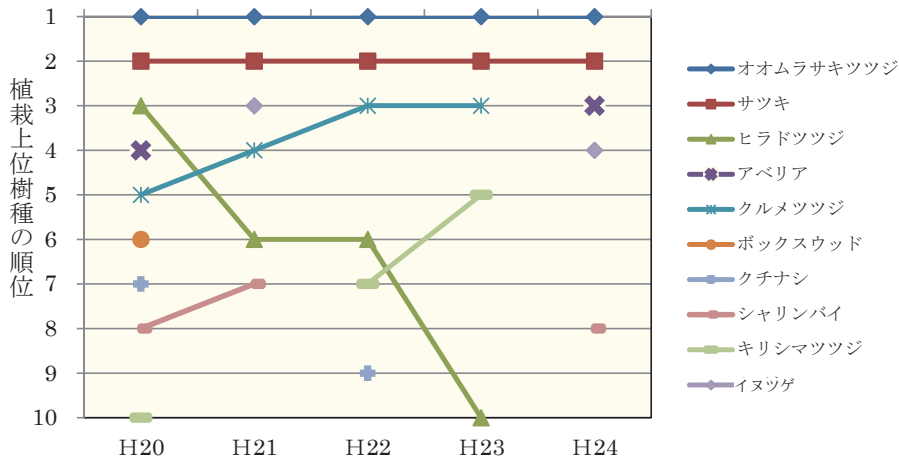


図-2 東京都の「街路樹充実事業」における常緑低木類の植栽利用頻度

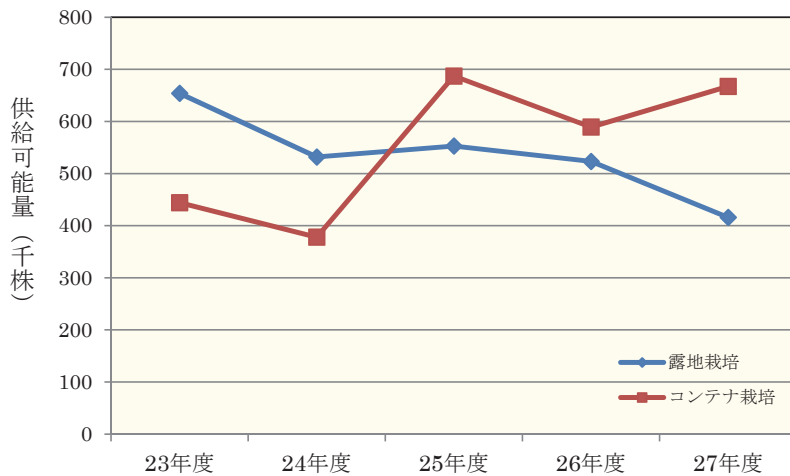


図-3 アベリアの栽培形態違いによる供給可能量の推移

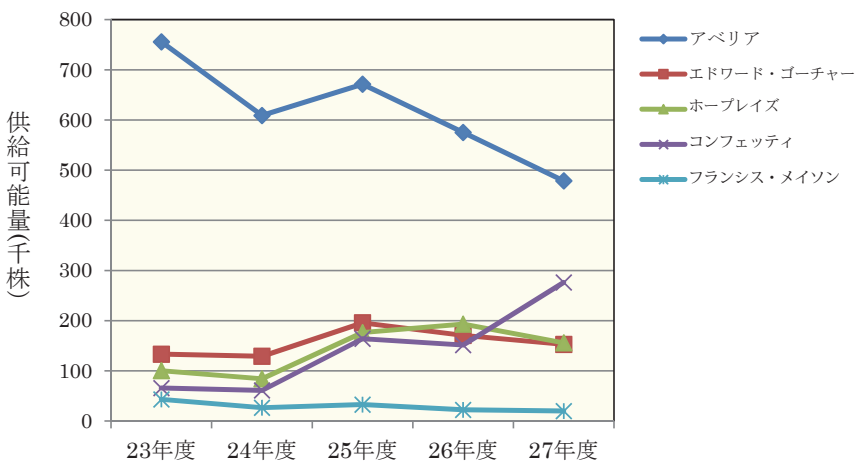


図-4 アベリアの品種の違いによる供給可能量の推移

27年には107万本と若干は減少しているもののほぼ横ばいで推移している(図-3)。

品種ごとの生産量は、基本種であるアベリアは露地栽培が主体であること

から平成23年の75万本から徐々に減少して、平成27年には47万本まで減少している。一方、コンテナ栽培が主流の多くの品種ものは、‘コンフェッティ’は平成23年の6万本か

ら平成27年には27万本に最も増加している。また、‘エドワード・ゴーチャー’、‘ホープレイズ’も増加傾向であり、そもそもの生産量が少ない‘フランス・メイソン’は、平成27年には2万本程度と生産量は極めて少ない傾向にある(図-4)。

アベリアの基本的な栽培体系は、繁殖においては前年枝を用いた休眠枝挿し、当年枝を用いた緑枝挿しが一般的であり繁殖は平易である。育苗はポリポット3号から4号に鉢上げされた1年生苗木を露地に定植するか、5号から6号のコンテナに鉢替えされている。栽培管理は、年2回の剪定を行い、施肥は化成肥料(N:P:K=8:8:8)を春肥は20kg/10a、夏肥15kg/10a施用する。また、施肥に合わせて中耕を行う。コンテナ栽培では自動灌水装置による灌水が主流であり、コンテナ用土は水持ち性向上や通気性の確保を目的としたパーライト等の土壌改良資材を基本土壌に混合している。露地栽培、コンテナ栽培とも除草作業には多大な労力がかかり管理コストを高めている。病害虫の発生は少なく栽培上の問題とはなっていない(表-1)。

3. 生産上の課題

緑化植物全般に言えることではあるが、需要に見合った生産供給体制の確保が重要な課題である。緑化植物の生産は需要を見込んだ生産であり、見込みが外れれば価格を下げてでも売れな

表-1 アベリア露地栽培の作業暦

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
繁殖・育苗			←→ 挿し木				←→ 挿し木			←→ 鉢上げ			
	1年目			←→ 定植				←→ 夏肥		←→ 剪定			
2年目			←→ 剪定				←→ 剪定						
			←→ 春肥				←→ 夏肥・中耕						
3年目			←→ 剪定				←→ 剪定				←→ 以降出荷		
			←→ 中耕				←→ 中耕						
病害虫防除	アブラムシ				←○→								
	斑点病						←○→						

* : ○は防除作業を行う。

い。利用者のニーズを2～3年前に把握できればその需要に向けて生産することは可能である。景気が落ち込み緑化が減少したとはいえ都市の再開発や植替え等需要はあり、生産者として緑化植物の一定の量と品質を担保した生産を続けることが大切である。また、植木産業もある意味ファッション性が必要である。ファッションをつくるのはメーカーであることからすれば、植木のメーカーである植木生産者はファッションをつくって行かなければならない。緑化植物の生産者は国内の未利用植物の商品化や育種、海外からの導入を行い、新しい緑化植物を世に出し続けている。しかし、残念ながら利用者側の方々への波及効果は低く消

費に結びついていない。利用者に向けて見学会や講習会等を通じて、植物の情報発信を行っている。これらの成果に期待したいところである。今後も需要と供給のバランスが崩れたままの状態が続くと利用者側の要望に応えることができなくなることが予想される。現状でも、必要とされる樹種や規格が揃わない事例がみられている。今後も消費が増えず未透視の立たない状態が続けば、生産者は緑化植物の栽培から他の品目へと転換が進むことが予想される。また、適正な価格を担保することも生産を継続する方法である。緑化工事では、工事の中に材料として植栽する緑化植物の費用が含まれている。価格競争の中では適正価格ではないこ

ともある。緑化植物の発注を別発注にすることも緑化植物の継続的な生産につながる。

都市緑化は、都市生活者のアメニティーの確保や環境保全に無くてはならない。劣悪化する都市環境を植物で緩和することは地球にもやさしい技術である。2020年の東京オリンピック・パラリンピックも控え、風格ある都市緑化が進むこと望みたい。

引用文献

財団法人日本建設物価調査会 2000. 新樹種ガイドブック.
一般社団法人日本植木協会 2011-2015. 都道府県別供給可能量調査.